



デア ハーフエン Der Hafen

Nr. 75
2025年7月-9月

激動する世界の中で、日独の企業はどこへ向かうべきか

横浜日独協会会長 成川 哲夫

いま世界は、歴史の転換点ともいえる激動の時代に突入している。国際秩序は大きく揺らぎ、地政学リスクと経済リスクが一体となって連動し、これまで「安定」と考えられてきた枠組みや信頼が根底から問われている。グローバル化によって社会の結びつきが強まり、一つの大国の方針転換が全世界の産業や人々の生活に即座に波及する現実を私たちは目の当たりにしている。

(1) トランプ政権の政策転換とグローバル経済への影響

アメリカではトランプ大統領が今年再び就任し、「アメリカ・ファースト」を掲げた対外政策を矢継ぎ早に打ち出している。5月にはすべての国に一律の追加関税を課し、これを個別交渉を通じて緩和する新たな通商枠組みを示した。中国に対しても高関税を課し、部分的に関税引き下げの合意が成立したが、抜本的な対立の解決には至っていない。こうしたアメリカの姿勢は、従来の多国間協調やルールに基づく国際秩序を揺るがし、アメリカ自身の国際社会における地位や信頼を損ねている。結果としてグローバル・サプライチェーンの安定性が脅かされ、世界経済の先行きは一段と不透明さを増している。

さらにアメリカは同盟国に対しても従来の信頼を前提としない姿勢を見せ、各国の企業や政府は将来予測の難しさに直面している。多国間協定からの離脱や再交渉要求が相次ぎ、政治的な意図が経済の安定や持続可能性よりも優先される場面が増えている。こうした動きは国際協調の精神に根本的な問いを投げかけ、ビジネス環境の不確実性がかつてなく高まっている。

(2) 日本企業の課題と戦略の転換

日本企業の多くは長らくアメリカ市場を成長と収益の源泉としてきた。今も多くの企業が米国事業を基軸とし、現地生産や直接投資を積極的に拡大している。こうしたこれまでの方針は合理的だったが、現在のアメリカの政策動向は、突発的な「例外」で

はなく、日常的かつ構造的な経営リスクとして捉え直すべき局面と言える。米国偏重の事業展開だけでは十分とせず、アジアや欧州、新興国への分散投資や調達・生産体制の多元化など、多軸型のグローバル経営が今後の成長のカギとなるだろう。経済安全保障の観点からも、サプライチェーンや市場展開のリスク分散を図り、環境変化に柔軟に対応できる体制づくりが急務である。



グローバルサプライチェーン再編は、実際に多くの企業現場に課題と変革をもたらしている。従来の米国・中国を軸にした生産や調達は、

いまや ASEAN 諸国やインド、欧州域内への分散・移管が進みつつあり、為替や物流、規制の変動にも備える経営が求められている。地域間競争も激化し、現地化のスピードや人材確保、法規制への適応など、多様な課題に応じた柔軟な戦略が問われている。

(3) 新たな段階に入ったドイツの戦略転換

ドイツも今年発足した CDU メルツ政権の下、憲法の財政規律を大幅に緩和し、GDP 比 5% という積極的な防衛予算を掲げている。防衛力強化とインフラ再整備に向けて前例のない資金投入を決断し、欧州の安全保障で中心的役割を担う姿勢を明確にした。また、エネルギー面では脱ロシア依存を徹底しつつ、再生可能エネルギーの拡大だけでなく、LNG や火力発電、原子力の再評価など、バランスの取れたエネルギーミックス政策へと方向転換を図っている。エネルギー安定供給と脱炭素、そして経済競争力の維持をどう両立させるか、ドイツは現実的かつ多面的な対応を模索している。加えて、人口減少や高齢化といった構造的な課題も抱える。人材不足を補うための移民政策の在り方や、産業転換に伴う中小企業の競争力維持、中国との経済関係、EU 内部での調整など、多様な課題が依然として山積している。こうした課題解決に向けて日独間の情報共有や政策対話の深化も今後重要性を増すだろう。(次頁へ)

(4)日独連携の新たな可能性と展望

このような時代にあって、日独両国が協力し、補完関係を強化していく意義はかつてなく大きい。両国は法の支配、自由経済、民主主義という価値を共有し、国際社会の安定と秩序維持に責任を担う先進国である。自動車や機械、化学、半導体、再生可能エネルギーなど多分野で実績があるが、AI や量子技術、カーボンニュートラルなどの先端領域でも、今後協力を深める必要がある。特に地方都市間や中小企業の技術協力、若手人材交流など草の根レベルの取り組みも求められている。今後は官民を挙げてこうした分野を戦略的に強化すべきである。

環境問題や社会課題への取り組みでも日独は大きな可能性を有している。気候変動やエネルギー転換、サステナブル社会の実現に向けて、それぞれの強みを生かしイノベーションと政策連携を推進すれば、世界的な課題解決の先導役も期待できる。

(5)未来志向の連携と人材育成の重要性

未来を切り拓くのは若い世代の国際意識と柔軟な発想であり、日独間での教育・人材交流、現場レベルのネットワーク形成が極めて重要である。双方が歴史や文化、産業構造の違いを学び合い、世界の変動に主体的に向き合う力を養うことが両国の発展の礎となる。将来のグローバルリーダー育成に向けたプログラムや、学生・若手研究者の交流促進も今後の協力の重要な柱となるはずである。日独両国が知恵と覚悟を持って連携し、不確実性の時代を共に切り拓いていく責務を果たすべき時ではないだろうか。

全期間を通じて適正に処理されていたと報告されました。

2025年度の事業計画（第4号議案）では、引続き認定NPO法人として高い公益性を踏まえた社会的責任を果たしていくこと、及び2024年度の神奈川県認定更新を受けて、続けて横浜市の認定更新を進めていくことが確認されました。またこれを踏まえた、2025年度予算（第5号議案）について報告が行なわれ、双方共承認されました。

ヤングクラブ会員の特典と会費の変更について（第6号議案）では、ヤングクラブ活動の再活性化を図る目的で、従来は無料であった学生会員の年会費を1,000円とすること、その他会報の送付方法などについての改定が提案され、承認されました。

役員の改選（第7号議案）では、現理事である小島拓人氏の退任及び現監事である中野繁氏の理事への変更と、後任監事としての勢能克彦氏、並びに新理事としての千原嗣朗氏の選任が承認されました。また、2025年4月19日の当協会理事会において提案・承認された現理事である佐藤恵美氏の常務理事就任、及び2025年4月1日付で神奈川大学の学長が小熊誠氏から戸田龍介氏に交代されたことに伴い、当協会の名誉会員も小熊誠前学長に代わり、戸田龍介新学長がご就任されることも報告されました。また顧問であった織田正雄氏はご逝去により顧問を退任されています。

総会後の新体制

会 長： 成川哲夫

副 会 長： 向井 稔、南雲淑子

常務理事： 津澤元一(事務局長)、山口利由子、
寺澤行忠、大堀 聡、佐藤恵美

理 事： ロベルト・ゼーリッヒ、
ハンス・ユーデック、中尾尚未、藤田 香、
北井康一、大治はるみ、西条りみ、
岡本博之、中野 繁、千原嗣朗

監 事： 戸井田裕之、勢能克彦、能登 崇

名誉会長： 早瀬 勇（前横浜日独協会会長）

名誉会員： 戸田龍介（神奈川大学学長、前横浜日独協会監事）

名誉顧問： 山中竹晴（横浜市長）

顧 問： 大瀬克博（前横浜日独協会副会長）

顧 問： 瓜谷綱延（株式会社文芸社社長）

運営委員： 井出航平

2025年度（第11回）定時総会報告 中長期ビジョンの更なる展開に向けて

事務局長 津澤 元一

5月17日（土）戸塚区総合庁舎3階多目的スペース（大）にて第11回定時総会が対面にて開催されました。

2024年度事業報告（第1号議案）及び2024年度決算並びに会計監査について（第2号議案）では、引続き多くの講演会等のイベントが対面で開催されたほか、神奈川県の認定ステータス更新のタイミングとなったことから、過去5年間の活動実績並びに今後5年間の計画を策定し、12月に認定更新の承認を受けたことが報告されました。また第3号議案では決算処理における計上誤りとその改善措置が報告され、それを合わせて監査人より年度末の会計処理の監査の結果、

「西行そして定家」の講演を聞いて感じたこと

理事 中尾 尚未



3月の講演は、寺澤行忠先生の「西行そして定家」でした。

先生には2017年に「日独文化交流と日本文学の中の女性」とい

うテーマでご講演頂いた時も重みのあるレジュメを頂いた記憶がありますが、今回も10枚に及ぶ資料をご準備いただき、昨年出版された「西行 歌と旅と人生」を読んだ方も、まだ読まれていない方にもご配慮



くださいました。文化委員会企画教養講座の「日本文学逍遥」の際も毎回資料を事前にご準備頂き、メールで送ってくださるので受講生皆感謝しております。

講演は、先生の説得力あるお声と語り口で始まり、ゆっくりとその世界にいざなわれました。

西行の生い立ち、桜、旅、山里の草庵生活、平家への親愛、神道などの切り口から73歳で示寂するまでの円熟の中、多くの和歌を残したことを通して、人となりや輪郭をとらえることができました。

定家は、余情妖艶の歌風を確立した新古今時代の指導者として、古代貴族社会が崩壊し中世武士社会へと移行する激動の時代に歌論書、秀歌選集を著し、芸術に生きようとした気迫と決意のようなものについて理解を深めることができました。

西行と定家は40歳余りの年齢の差はあるものの、ほぼ同時代を生きた歌人で、両者の歌風や生き方は全く違い、人生派で抒情派な西行と構成派で耽美派の定家とされるようです。

今回の講義を聞いて私なりに感じたことがあります。私たちは何をいいな、あじわいがあるなど感じるのでしょうか。その感性の原点は、このような歌人たちの感性に通じるものがあるのではないかしらと思ったことです。

外国の人と交流する際には、互いの興味や関心を理解し、尊敬しあえることが大事だと思います。そのためには、自分の美意識はどこから来ているのか認識することも大切だと思います。自分自身を知るという闘い

の先にこそ、他との交流は成立するのではないかと感じたことです。私たちの感性の出所を見つけたように思いました。

功績を残し神格化されている定家が、敬意をもって、自由に生きた西行の和歌を選んでいることを知り、先生のご専門の西行のお話が聞けましたことを嬉しく思いました。

西行については、これまでも多くの作家たちが、その魅力に迫ろうとして、いろいろな試みをしています。どうして、これほどまでに人々の気持ちを引き付けてやまないのでしょうか。時代のルールを超えて人々の心をとらえるもの、容易にはつかめない、接近すら難しいが、あえて挑戦してみたくなるものがあるのかもしれない。

当時の歌壇というものがどのようなものか、はかり知れませんが、歌壇に生きた定家は、歌いたいものを歌い切った西行へのあこがれのようなものもあったのでしょうか。争いを好まず、歌を通して自分自身と戦っている孤高の歌人西行と、その人の和歌を選び続けた定家、今回の講演を聴講して千年余り前のこの二人の関係に思いを馳せることができました。

たまたま竹西寛子「伽羅を焚く」の本を読んでいた時、「わたしは、和歌の歴史のないところに現代の日本語はないと思うにいたった。」という文章を見つけました。私たちの感性の源はここにあるという揺るがない言葉に出会い、私が寺澤先生の講演を聞いて感じたことに力を添えていただいたような気がしました。



「ロゴセラピーの紹介セミナー」に参加して



演題:「何があっても《それでも人生にイエスと言う》」ができる
～ロゴセラピーのご紹介～

会員 橋本 一史

ロゴセラピーという言葉は昨年11月の日独研究フォーラムでの勝田芽生先生のセミナー、Eテレで6回にわたり放映された「こころの時代 ヴィクトール・フランクル《それでも人生には意味がある》」があったことを思い出し見直しました。草野氏の講演内容にEテレの内容を捕追し、解説させていただきます。



講師:琉球大学人文社会学部
准教授 草野 智洋氏
臨床心理士、公認心理士、
日本ロゴセラピスト協会認定
A級ロゴセラピスト

ロゴセラピー (Logotherapie (Logos: 意味 + therapie: 心理療法)) は心理療法の三大学派の一つと言われ、心理療法の一つというよりも、「人間学」「心理療法」「哲学」の3領域にまたがる理論体系です。

人間としての在り方を、意味を知ることによって気持ちに楽にし、自己治癒力で苦しみの中にある人々を直していく療法で、どのような人間観・世界観・人生観を持って生きるか問う、「trotzdem ja zum Leben sagen」(それでも人生に"YES"という)言葉に代表される「どのような状況にあっても人生を肯定できる」という心理療法です。

ヴィクトール・フランクル (1905-1997 ウィーン在住 ユダヤ人) は、ロゴセラピーの創設者で精神科医です。ナチス・ドイツの迫害に家族と共に収容所に移送され人間の尊厳を奪われた極限の中で、収容前に考案したロゴセラピーを、収容所で絶望の中で確認・検証しました。「医師によるメンタルケア」の中にそれらの内容を書いています。

戦争終了後解放され両親、兄弟、愛妻が死亡したことを知り、自殺を危惧した友人が心配し精神科医として勤務先病院を紹介し、悲しみの中ロゴセラピーを本として書くことが生き残った私の使命と意味付け医師としてフランクルの代表作「死と霧」を完成しました。(生前40冊ほど著作があるそうです)

ロゴセラピストの系譜として、フランクルの一番弟子エリーザベト・ルーカスは心理療法家でドイツでロゴセラピー研究所を開設し、ルーカスからロゴセラピーを学んだ日本人初のロゴセラピスト勝田芽生氏、勝田氏から学んだ今回講師の草野智洋氏がいます。

フランクルは高校生の時精神分析学者ジグムント・フロイトに手紙を書き、弟子のアドラーに師事し大学生時代から各地で講演したそうです。フロイトの分析論はエロスに拘ることやアドラーの人間はこういうものだと言ふことに疑問が生じ、人間の内側には心と体、精神次元の素晴らしいものがある。ロゴセラピーが説くのは「私が私の人生を」「あなたがあなたの人生を」意味あるものにするための生き方と言います。

自分を守ろうとする要求行動が精神次元に意味が表れると言います。意味は自分で作ったものではなく、外部からの問いに呼びかけられたことに答えることだと言います。「意味への意志」が満たされれば(私見ですが「悟り」を得る)人間は充足感を持つ。

フランクルは人が生きる意味の欠如が原因となり、病気になる可能性があることに気が付いたと言います。フロイトは疾病の原因を深層心理に求めましたが、フランクルは潮の満ち引きにたとえ、絶望的な状況から離れ見方を変えて捉えなおす「自己距離化」、別の精神次元に到る「自己超越」で、大きな「意味」の選択に応じることによって人はより人間らしくなりそれが、人生の苦境を乗り越えられようとしています。戦後診療しているとウィーンで今までに見られることがなかった疾病の若者が増えたそうです。フランクルは平和で豊さの中で意味の実存的な「意味の喪失感」、「過剰自己観察」が原因と解説しています。

フランクルは死生観を「人生の砂時計」に例え砂時計上部の砂が可能性のある「未来」、「現在」をくびれ、下部を過ぎ去った消えることない「過去」とし都度「瞬間」の意味が蓄積されると言います。ここで未来の可能性で良い「意味ある瞬間」で良い行いを選択することで「意味のある生き方が大事」「一瞬一瞬を大切に生きる」ことができると言っています。

意味を感じる「良心」とは精神次元での「意味」を受信する器官と言ひ、フランクルは良心を磨くことだと言っています。

今回の一連のイベントは、いじめや自殺願望の若者の多いことや、コロナ禍閉塞状況だったことなどから今ほど心のケアが必要であることが企画された理由だと思います。心理療法が生まれた西洋社会とはバックグラウンドが異なる日本での「意味」の捉え方に違いがあるのかなど意見が散見しました。

最後にEテレでのフランクル自身の映像での言説を引用しレポートを投了したいと思います。「生きる意味は必ずあります。人間は苦悩や死さえも自らの人生の糧とすることができるのです。その時々「意味」を見つけ出してください。」

「世界に広まる囲碁の魅力」

日本棋院棋士 9 段、元東京大学教養学部客員教授
石倉 昇氏講演会

事務局長 津澤 元一

5 月 17 日（土）午後、プロ棋士である石倉昇氏の講演会が、戸塚区民センターにて開催されました。石倉氏は東京大学在学中の昭和 51 年、全日本学生本因坊戦に優勝する等、学生時代から華麗な囲碁での実績を積んでおられました。大学卒業後は、一旦（株）日本興業銀行（現みずほフィナンシャルグループ）に就職されましたが、そこで 2 年経過した昭和 54 年、一念発起して退職。退路を断って、年齢制限ぎりぎりでのプロ棋士の試験に挑戦し、見事に合格、その後はプロ棋士として順調に昇段され、現在は最高位である九段。

対局に加え、NHK 囲碁講座の講師を務めた他、母校である東京大学教養学部客員教授を務め、また多くの著書、囲碁ビデオ DVD も多数出版するなど、囲碁の普及に積極的な活動をされています。個人的には、石倉氏は、前述の（株）日本興業銀行で同期入行した仲で、最近はその職場の同期会などでも時々お会いしています。当日は、今や世界中の人々が楽しむゲームとなっている囲碁の魅力、世界の囲碁事情、教育と囲碁、囲碁の歴史などにつきお話を頂くことになりました。



お話は、まず囲碁が持つ各種の魅力についての紹介から始まります。世界で 6500 万人の愛好家がいるこのゲームは、子供の情操教育に最適であり、男女差もなく、高齢者でも強くなれる等、思考力、バランス感覚、忍耐力や集中力、更には大局観等を養成できるということで、2005 年からは東京大学で単位の取れる授業として採用されたのを始めとして、現在では多くの小中高校、大学でも正規授業に採用されているとのこと。そして日本の伝統文化として、「源氏物語」や「枕草子」にも取り上げられ、菅原道真、徳川

家康、大久保利通、渋沢栄一、アインシュタイン、ビル・ゲイツを始めとする古今東西の著名人が愛好したことも良く知られています。

ドイツとの関係では、数学者で教育者でもあったフェリックス・デュバル博士が、日本で囲碁を学んで帰国した後の昭和 11 年、当時衆議院議員であった鳩山一郎氏と、日独間で電報碁を打ち、その棋譜が東京日日新聞に掲載され人気を博したという話が強く印象に残ることになりました。

そしてそうした囲碁の歴史や 19 世紀以降の世界への広がり、そして最近の男女日本選手の活躍、更には「アルファ碁」と呼ばれる AI の棋士たちへの影響などが紹介された後、同日アシスタントとして同行された現役大学生である中間理乃さんも交え、会場の白板を使った簡単な囲碁のルールや戦略などが紹介されました。

当日の参加者は、小生を含め、囲碁については素人がほとんどという様子でしたが、石倉氏の軽妙且つ分かり易い説明を聴き、新たに囲碁に関心を持たれた方も多かったようです。特に、高齢者でも始めるには遅くなく、また思考力の維持に最適であるといったご指摘は心に残りました。個人的な話になりますが、小生の父親は囲碁を嗜み、石倉氏がプロに転向した後しばらくは、時折同好の友人を実家に集め、石倉氏の指導を受けていました。その結果か、父は最期まで頭はボケることがありませんでした。そんなことも考えながら、自分もこれから石倉氏の著作や DVD を入手して、頭のトレーニングを始めようかと思案しているところです。



フランクフルト独日協会からの高校生 ～アーメット・アリ・ギュルソイ君～



常務理事 佐藤 恵美

今年度もクノープラオホ副会長の引率で、作文で優秀賞を受賞した高校生が横浜に滞在しました。4月18日夜から21日朝まで、今回は会員の今井様のお宅にホームステイしました。そのご家庭での楽しく生き生きとした様子が今井様の文章から伝わってきます。



横浜での歓迎会、南雲副会長と女子高校生のお孫さんとのアニメで盛り上がった会話、大治さんとの「みなとみらい」散策、神奈川大学ブッヘン

ベルガー先生と学生さんとの散策と「ガスト」での給仕ロボットとの遭遇。山口さん、大治さん、佐藤との江の島から江ノ電「アニメの聖地」や大仏など、彼にとっても盛沢山で刺激のある日々だったようです。

最後に成田から、「憧れの日本に着いてからの旅行は楽しかったけれど、どこかよそよそしく感じていたのが、横浜に来て変わりました。その短い3日間は自分の人生で一番素晴らしい時間になりました。それは観光地や場所の魅力ではなく、皆さんがいてくれたからです。」というような内容の連絡をくれました。とても礼儀正しく優しい彼は、周りの人皆をファンにしたようです。

ドイツに帰ってからの活躍とまた会う機会があるのを楽しみにしたいと思います。(佐藤恵美)



☆なお、アーメット君の作文の翻訳もホームページでご覧いただけます。

“Angriff des Titans”がやって来た！

会員 今井 裕一

はじめに

Ahmetさんを、ホストファミリーとしておもてなしをした今井家です。ホストファミリーは初体験だったので、最初は不安で一杯でしたが、昼間は役員の方々が観光地を案内していただいて、私たちは普段食べている朝食と夕食を一緒に食べて、寝るまでの間しばし御歓談といった簡単な役割だったので、3泊4日はあっという間に過ぎてしまいました。また、ドイツ語力が怪しい私とドイツ語に全く縁がない妻にとって一番の不安であったコミュニケーションも、翻訳機を使って、毎日楽しい会話で盛り上がりました。



今回は彼との交流を、3つ「M」のキーワードで紹介します。

Muslim



Ahmetは、フランクフルトから車で1時間半のLandstuhlという町に、両親と姉と妹の家族5人で住んでいます。一家は、彼が8歳の時に、トルコからドイツに移住してきたイスラム教徒なので、彼も私の家で、朝起きた後と夜寝る前の1日2回、シャワーで手足を清めた後お祈りをします。昨年私たちはトルコを旅した時に、街に流れる礼拝の時刻を知らせる呼びかけ「アザーン」に凄く魅せられたので、彼に「アザーンをお願い！」と無茶振りをする、快くスーッと立ち上がり目をとじ美しいアラビア語で唱えてくれました。Danke！

さて、イスラム教徒といえば、食事です。豚肉、豚肉由来の成分（ゼラチン等）はもちろんのこと、豚肉以外の肉であっても、イスラム教で定められた手順で殺処理されていないものを食べることは禁忌とされているので、食事は、いつもの食べている料理を肉無しでアレンジしました。後日、「うちのご飯で何が一番美味しかった？」と聞くと、“Alles wirklich war lecker. Aber das vegane Curry war äußerst köstlich und die Chikuwa mit Pilzen Suppe war auch besonders lecker!”と大人の回答が返ってきました。竹輪、覚えてくれたのね ww。

Ahmet は、日本のアニメが大好きです。身長 190cm のビッグな彼に初めて会った時、仕込んでいたアニメネタで「あなたは進撃の巨人“Angriff des Titans”のようだ。」と挨拶すると、彼は素で喜んで「進撃の巨人は、ドイツのネルトリンゲンの街をモデルにしているんだよ」「主人公の Eren Jäger の Eren は、トルコでよくある名前です。聖人という意味なんだよ」等々と熱く語ってくれました。ちなみに、彼の押しアニメは、「YAWARA!」を描いた浦沢直樹先生のドイツ、チェコを舞台としたサスペンス作品「MONSTER」です。ハリソンフォード主演の映画「逃亡者」みたいな話です。当然、彼自身の一番の日本のお土産は、2冊の MONSTER のコミック本でした。



ポケモンも大好きな Ahmet の、一番のお気に入りの写真。横浜市役所前で撮影。

Miyamoto Musashi

彼が惹かれるもう一つの日本文化が武士道です。彼曰く“Samurai sind zwar sehr interessant, aber Ronin faszinieren mich noch mehr. Besonders beeindruckt mich das Leben von Miyamoto Musashi.”そして、その理由が、「常に旅をして新しいことを学び、発見しながら、特定の分野で一番になろうと努力することは、最高の生き方だから」だそうです。ならばと、私が大好きな浪人を題材にした BS テレビ時代劇と一緒に鑑賞。彼が「このタイトルは何？」と聞いてきたので、思わず即答、“Wolf mit Kind!”

おわりに

この他、ロンドン旅行中の彼の両親と WhatsApp で話したこと、一番の思い出になったという夜の横浜港のハプニングなど、お伝えしたいことはまだまだありますが、私たちへの一番のプレゼントは、彼と彼の両親が私たちに“Wir freuen uns darauf, Sie in unserem Haus zu begrüßen, hoffentlich so bald wie möglich”と言ってくれたことでした。ありがとう Ahmet! もっとドイツ語を勉強して来年遊びに行くからね。(多分 ww)

緑の鎌倉散策

2025/6/4

会員 地野 洋子



雨の翌日好天に恵まれ、文化委員会寺澤行忠先生ご案内のもと15名で鎌倉散策に参加しました。

鎌倉駅から浄妙寺バス停まで乗車、竹の寺で有名な報国寺の庭園を散策、太い青竹が清々しく印象的でした。



続いて重厚な洋風建築、旧華頂宮邸の手入れの行き届いた庭園を見学、その後鎌倉五山の古刹、臨済宗浄妙寺を拝観、広い境内を散策後奥

の高台にある「石窯ガーデンテラス」でゆっくりランチを楽しみました。



午後は国指定重要文化財の和風建築、京都から移築されたという一条恵観山荘の趣ある庭園を訪れ、その一角にあるカフェで一休み、バスで鎌倉駅まで戻りました。

境内や庭園のあふれる緑を浴びて心身共にリフレッシュされた楽しい散策でした。



文化委員会企画

教養講座「日本文学逍遥」

【日時】原則として毎月第1水曜日 13:00～14:30

- ・ 7月2日(水) オンライン講座
- ・ 8月 休会
- ・ 9月3日(水) オンライン講座
- ・ 10月1日(水) オンライン講座

【講師】寺澤行忠常務理事(慶応義塾大学名誉教授)

編集後記

フランクフルトの高校生、アーメット君を江ノ電で「スラムダンク」の聖地「鎌倉高校前」の踏切に案内した時のこと、海外からの旅行客でゴッタ返している踏切前で写真を撮ってあげようとカメラを向けたらアーメット君は、こちらに背を向けたまま、踏切と海を見ていました。これは、実は有名なシーンで主人公が海と踏切を前にしてこちらに背を向けているのだそうです。

漫画を通して世界中の若者が日本や日本語に興味を持ってくれるのは嬉しいですね。先日も日本語を勉強しているドイツ人の女子学生に日本語を習い始めた動機を聞いたところ、セーラームーンのアニメを見て、どうしても日本語で漫画本を読みたかったと言っていました。また、世界中のサッカー選手のサッカーを始めた動機に「キャプテン翼」を読んだというのが多いそうで、その中に有名な海外の選手も多くて驚いたことがありました。

どうしても原語で読みたいものがあれば、私も少しは外国語が上達していたかしら…と考えさせられた出来事でした。(山口)

新入会員

- ・ 佐藤 守彦 様 (4月入会)
- ・ 利根川 恵 様 (4月入会)
- ・ 三和 花梨 様 (6月入会 学生会員)
- ・ 勢能 克彦 様 (6月入会)



Instagram

認定NPO法人横浜日独協会会報 発行 2025.7.1 (第75号)

所在地: 〒247-0007

横浜市栄区小菅ケ谷1-2-1 地球市民かながわプラザ

NPOなどのための事務室内 事務局: 津澤

Tel: 080-7807-7236

会報編集責任者: 山口 利由子

E-Mail: riyuko.yamaguchi@gmail.com

横浜日独協会ホームページ <https://jdgy.sub.jp>



イベント予定

■7月 イベント:

- ・ 日時: 7月19日(土) 15:00～16:45
- ・ 会場: TIME SHARING 3B
横浜関内セルテ アネックス3階
関内駅北口1分(「セルテ」の別館で左寄り裏の建物)
- ・ 講師: 酒井健太郎氏 昭和音楽大学准教授
筑波大学で生物学と現代思想を学んだ後、同大学院で芸術学を専攻。博士(芸術学)
- ・ 演題: ドイツ出身の音楽家クラウス・プリングスハイムと日本

クラウス・プリングスハイム(1883-1972)は、ミュンヘンの裕福な家庭に生まれ、グスタフ・マーラーの弟子そして友人として音楽の研鑽を積み、その後、ベルリンで「黄金の1920年代」を経験しました。1931年、東京音楽学校(現在の東京藝術大学音楽学部)の外国人教師として来日し、以来、亡くなるまでのほとんどの期間を日本を拠点に活動しました。約40年間にわたる日本での活動を振り返り、彼が日本の音楽界に何をもたらしたか考えます。

- ・ 参加費: 1,000円 会員以外の方もご参加頂けます。

■9月 イベント:

- ・ 日時: 9月20日(土) 15:00～16:45
- ・ 会場: 未定
- ・ 講師: サンドラ・ヘフェリン氏
ミュンヘン出身、東京在住のエッセイスト
- ・ 演題: ドイツ人は飾らず・悩まず・さりと老いる
日本もドイツも高齢化社会。人間「老いる」のはみんな同じだが、向き合い方や感じ方には国や文化による違いがある。たとえば「家族観」や「恋愛観」。高齢者の恋愛について、ドイツでは全面的に応援するような雰囲気がある。「ドイツ人は飾らず・悩まず・さりと老いる」(講談社)の中に書かれているエピソードなども紹介しながら、節約、認知症、介護、安楽死、お墓の問題なども含めてドイツ流の「老い」について考える。

法人会員(順不同)

株式会社文芸社	ウインクレル株式会社	ボッシュ株式会社	トルンプ株式会社	公益財団法人登戸学寮
ワインブティック伏見	モトスミ・ブレーメン通り商店街振興組合		横浜国立大学一成長戦略研究センター	
株式会社コトブキ	神奈川大学	日本バウシュ株式会社	一般社団法人如水会 横浜支部	日独産業協会(DJW)
キャリア・デベロプメント・アソシエイツ(株)		富士・フォイトハイドロ株式会社	フェリス女学院大学	